一年学年だより

No.１１	２月号
令和３年１月 28 日発行	
１０９ＨＲ	

セレンディピティ

戦後しばらくのころ、アメリカでは対潜水艦兵器の開発に力を入れていた。そのために、潜水艦の機関音をとらえる優秀な音波探知機をつくる必要があった。探知機をつくろうとして実験していると、潜水艦から出ているのではない音が聞こえる。しかも、それが規則的な音響である。この音源はいったいなにか、ということになって調べてみると、これがなんと、イルカの交信であった。それまでイルカの“ことば”についてはほとんど何もわかっていなかったのに、これがきっかけになって、一挙に注目を集める研究課題としておどり出た。

このような思いがけない偶然から、まったく別の新しい発見が生まれることを、科学者の間ではセレンディピティと呼んでいる。セレンディピティは科学の世界だけではなく、日常の生活の中でもときどき経験する。

１月 16 日に行われた大学入学共通テストの地理Ｂにおいて、日本三景の一つに数えられる天橋立に関する問題が出題された。その問題の写真が、なんと、１月９日放送のブラタモリに登場した景色だという。放送を見ていた受験生にとって、まさにセレンディピティ現象だっただろう。

しかし、この予測していなかった偶然の幸運は、誰のもとにでもやってくるとは限らない。セレンディピティをつかむためには、日頃から「幸運な偶然を手に入れる力」を鍛えておかなくてはいけない。この力には、日常の中に潜む様々な物事にアンテナをはることと、物事に対して向き合う姿勢が要求されており、その者だけが、目の前の偶然な幸運に気づくことができる。先述した共通テストにおいても、番組が地理や地学に関する知識を得ることのできるツールだと知ったうえで放送に向き合っていた者でなければ、番組を見ていたとしても、問題との関連性に気付くことは難しかったのではないだろうか。一つ一つの物事に向き合う中での気づきが、私たちにセレンディピティをもたらしてくれる。

さて、２月はセントラルマラソンに学年末考査と行事が目白押しである。日々の練習や授業にきちんと向き合っていた者には、セレンディピティを経験することがあるかもしれない。みなさんの幸運を祈っている。

参考図書『思考の整理学』　著・外山滋比呂　　（１０９ＨＲ担任）

☆ ☆

写真を撮り始めると日ごろ気にかけない日常生活の様々なものにハッとさせられることがある。それは通勤途中にみかける見慣れたキャベツ畑であったり、海岸方面に沈む美しい夕陽であったり、毎日見ているものに改めて美しさを感じることがある。写真を撮っていると被写体に向き合うことで当たり前に思っていた日常に新たな価値が見出されるからだ。

今、コロナ禍の中、当たり前であったことが否応なく見直されつつある。全国大会がなくなった部活動、キャンパスライフがなくなった大学生活、会社勤めがなくなった会社員。　8 月 19 日に立命館大学の学部生の約 25%が休学を、約 10%が退学を視野に入れているという衝撃的な調査が話題になった。厚生労働省によると、新型コロナウイルスの影響による解雇や雇い止めなどで仕事を失った人は、見込みも含め 7 万人に上るという。今まで当たり前と思っていたことが当たり前でなくなる時代。自分が正しいと信じてきた価値観が崩壊していく時代。敷かれていたレールに乗っかり終点まで行くと信じていた列車から降りて自らの足でゴールを目指さなければならない。

今、自分に向き合うことが要求されている。当たり前に学校に行き、当たり前に部活をして、当たり前に受験する。もう一度自分が何をしたいのか、どこに向かっているのか、考えてみることが必要だ。自分に向き合うことは痛みを伴う。存在価値が希薄になったりする。しかし、向き合うことに恐れず、この厳しい時代を乗り越えて新しい価値観を見つけ出さなければならない。　　（１０９ＨＲ副担任）